(C)東奥日報社

月を愛でそぞろ歩き

本県・岩手 有志が親睦団体設立

風情楽しみ交流深める

種差海岸・階上岳 三陸復興公園

太古から人々の暮らしに密接に関わってきた月を知り、親しむ親睦団体「海の月、山の月、戸（へ）の月の会」（通称・戸の月の会）が20日、八戸市と岩手県二戸市の愛好者が発起人となり発足した。種差海岸近くの民宿石橋に両市からの関係者と、同様の団体「月の会・東京」のメンバーらが応援に駆け付け、約20人が三陸復興国立公園に指定された種差海岸の天然芝生地から十三夜の月を愛（め）でた。（珍田秀樹）

月夜の天然芝生地で、空を見上げる月愛好者＝20日午後8時47分

設立記念講演で、月の魅力を語る志賀さん（左奥）の話を聞く参加者

岩手県の「戸」がつく8市町村から参加者を募る。月の会・東京は、全国で「月の会」結成を働き掛けており、これまで10団体ほどが活動。「戸の月の会」も同会と連動し、活動する。

同民宿で行った結成式で、日本読書新聞編集長を経て「月と季節の暦」を制作・発行する、月の会・東京主宰の志賀勝さんが結成記念講演。「月は誰にでもあまねく、光を無償で与えてくれる。太陽の光の美しさを楽しめるのは日の出、日の入りの数分だが、月は長い時間楽しめる」と、月の魅力を語った。

同日、種差海岸では午後4時21分に東南東から月が昇った。参加者は天然芝生地から水平線付近の雲を抜けて月が顔を出す瞬間を待ち歓声を上げたか、午後8時すぎ、の芝生地をそぞろき、薄雲に覆われたを眺めた。

首都圏から訪れた加者は地元の心づくのもてなしと、心地よい風に吹かれ「こんなにいいところがあるとは知らなかった」「また、訪れたい」と同海岸が気に入った様子。栗林さんは「月が人と人を結ぶ。二戸では見えない、満月が昇るところを種差海岸で眺め、二戸では古民家を再生した交流施設『縄文のうずまき社』から見るなど、交互に行き来したい」と話した。

問い合わせは「縄文のうずまき社」（電話0195㉗4198）、民宿石橋（0178㊳2221）へ。

無断複製・転載を禁じます